

今治 Towel & Towelling

いまはり

VOL.4
2 FEB. 2002

クロスアップタオル人 宮崎研一 戦後タオル発展の立役者

生活の中のタオル 海外の暮らしのオーストラリア篇 トレントのビーチタオル

見城美枝子「フェスタdeタオル」

タオルでひとやすみ

ゴッホ好みのタオルが欲しい! 早坂暁(作家)

私とタオル 小池千枝・原映子・今治タオル体操愛好会

タオルのふるさと紀行「今治藩家老家の婚礼料理」

今治および芸予諸島の主なイベント・祭りガイド

“ゴッホは明るい陽光に満ちた南仏プロヴァンス地方を日本と信じて、自分の絵画を開花させてゆく。『日本に行きたい。日本人になりたい。日本の絵描きのように生きたい。』”
“ゴッホの絵をみてほしい。あの画布を支配する渦巻きは、まさに来島海峡の渦潮そっくりではないか。” 早坂 暁(本誌6頁より)

Vincent van Gogh(フィンセント・ファン・ゴッホ)「星月夜」1889年6月
Hans Hinz-ARTETHER/©AFLO.FOTO.AGENCY

今治および芸予諸島の 主なイベント・祭りガイド

(平成14年4月～平成15年3月)

◆能島桜まつり

4月13日(土)・14日(日)〈予定〉 宮窪町能島
問い合わせ/宮窪町産業観光課 TEL.0897-86-2500
★能島村上水軍の本拠地であった能島は桜の名所として有名。満開の桜の下、水軍太鼓の披露やお茶会などが開かれる。

◆いまはり緑化フェア

4月27日(土)・28日(日)〈予定〉 市民の森・フラワーパーク
問い合わせ/今治市公園緑地課 TEL.0898-36-1563
★植木まつり、花苗・野菜苗の即売など、いろいろなイベントが開催される。

◆島四国へんろ市

5月1日(水)・2日(木)・3日(祝) 宮窪町・吉海町
問い合わせ/吉海町産業観光課 TEL.0897-84-2111
宮窪町産業観光課 TEL.0897-86-2500

★大島全域を四国遍路にみたてた島四国八十八カ所を巡る。

◆第8回今治タオルフェア

5月11日(土)・12日(日) テクスポート今治
問い合わせ/四国タオル工業組合 TEL.0898-32-7000
★全国一のタオル生産地である今治のタオルメーカーが、一堂に集まって開催する即売会。

◆バラ祭りようみ2002春

5月25日(土)・26日(日) 吉海町バラ公園
問い合わせ/吉海町役場 TEL.0897-84-2111
★バラの美しい時期に開催。朝市、バラコンテスト、フラワーアレンジメントなどの体験教室など盛りだくさん。

◆大山祇神社御田植祭

6月15日(土) 大山祇神社
問い合わせ/大山祇神社 TEL.0897-82-0032
★古式にのっとり、早乙女と田男が御田に苗を植える厳粛な行事。一人角力の奉納、少年相撲大会も開催。

◆水軍レース大会

7月14日(日)〈予定〉 宮窪町能島沖
問い合わせ/宮窪町産業観光課 TEL.0897-86-2500
★復元した村上水軍の小早船で行うレース大会。レースの合間には水軍太鼓や舞踊などが披露される。

◆三島水軍鶴姫まつり

7月20日(祝) 大山祇神社から宮浦港までの参道
問い合わせ/大三島町商工会 TEL.0897-82-0795
★鶴姫をはじめ水軍の武者に扮し、華麗な時代行列を繰り広げる。

◆サマーフェスタかみうら2002

7月28日(日) 多々羅総合公園・戸板海岸
問い合わせ/上浦町産業観光課 TEL.0897-87-3000
★立て干し網を中心に、歌謡ショーやシーサイド市を開催。花火大会でフィナーレを飾る。

◆今治市民のまつり・おんまく

8月3日(土)・4日(日) 今治港周辺・広小路・中心商店街
問い合わせ/今治商工会議所内今治市民のまつり振興会 TEL.0898-23-3939
★チームごとの自由な振り付けが楽しいダンスパリサイ、木山音頭、籠ぎ獅子、花火大会などで大いに盛り上がる。

◆はかた夏祭り

8月14日(水) 伯方S・Cパーク
問い合わせ/伯方町商工観光課 TEL.0897-72-1500
★花火大会、盆踊り、夜店などでにぎわう伯方の夏の一大イベント。

◆てんてこ

8月中旬の1日間 魚島大木海岸
問い合わせ/魚島村教育委員会 TEL.0897-78-0011
★刀と扇子を持って扮装した一団が東西にわかれ、狂や太鼓のはやして中央に練っていく勇壮な伝統行事。

◆今治せんいまつり2002

10月上旬の2日間 今治地域地場産業振興センター
問い合わせ/今治地域地場産業振興センター TEL.0898-32-3337
★デザインコンクール、タオルや特産品などの展示即売を行う。

◆第9回今治タオルフェア

10月25日(金)・26日(土)・27日(日) テクスポート今治
問い合わせ/四国タオル工業組合 TEL.0898-32-7000
★全国一のタオル生産地である今治のタオルメーカーが、一堂に集まって開催する即売会。

◆バラ祭りようみ2002秋

10月27日(日) 吉海町バラ公園
問い合わせ/吉海町役場 TEL.0897-84-4322
★秋のバラの開花にあわせて、各種イベントを開催。

◆いきな島一周マラソン大会

3月第2日曜 生名島全域
問い合わせ/いきな島一周マラソン大会実行委員会(生名村役場内)
TEL.0897-76-3000

★生名島を舞台に、ゆっくりマラソンを楽しむ大会。3km、5km、10kmのコースがある。

※平成14年2月調べ

本紙に関するご意見・ご要望がございましたら事務局までお寄せください。

宮崎 研一



戦後タオル発展の立役者

今治綿織物業の事実上のスタートは、明治十九年に矢野七三郎によって創始された「伊予綿ネル」に始まるといつてよい。その後、幾多の紆余曲折はあったが、先人達の知恵と努力があつて、その伸張は太平洋戦争で国土が灰燼に帰するまでつづいた。

「四国のマンチエスター」と呼ばれ、綿織物の町として内需・輸出ともに全盛を誇った今治織物業界も、敗戦と同時に他の産業とおなじく、文字通りゼロからのスタートを余儀なくされることとなったが、「災い転じて福となす」の喩え通り、再興意欲に燃えた男たちは、戦災で焼失した工場の建設と組織導入に力を注いだ。

それとは逆に、日本一のタオル生産地だった大阪地区は偶然にも戦災をまぬがれたために、古い設備のまま戦後の新しい時代をスタートしたのだが、そうした両産地の対照的な事情の差が、その後の発展の明暗をわける分水嶺となつた。

たのだからまったく皮肉なものである。

戦後における今治タオル産業の発展は目ざましく、「貿易立国」を国是とする経済政策に呼応して業界は輸出振興に戦略をおき、ドル資金の獲得に大きな寄与をした。タオルの総輸出量の八〇%を今治地区が担ったのである。

そのタオル輸出の戦略プランを手がけ垂範実行していった人物が宮崎研一だった。

丸三タオル(協)の理事長だった彼は、今治織物業界に一大山脈を形成する「宮崎一族」の一員で、業界の「サラブレッド」でもあった。

従兄弟の中には、三井物産(株)の社長に就任した宮崎清を筆頭に、広幅綿布やタオル製造業の創業者たちがいてリーダーとしての資質が自然身にそなわっていた。

また「宮崎一族」は有名なクリスチャンの家系でもあった。研一は東京の大学卒業後まもなく、叔父のすすめで今治教会で洗礼をうけた。そし

て「日曜学校」で知り合った女性と大恋愛のすえに結ばれるという「離れ技」まで演じて話題を提供した。

しかし、彼の思想・信条に一大転機をもたらせたものは、戦後の早い時期に経済視察団の一員として渡米したことで、その体験から彼は二つの大きな教訓を得た。

一つは、アメリカ国家が持つバイタリティの凄さ。もう一つは、何事も公平にしておれば報われるという信念を得たことだった。

アメリカ旅行は彼に個人的にも大きな土産をもたらしたが、今治にも大きな土産を持って帰国した。それは組合教会から「金の十字架」を土産にもらったことだ。今治教会には戦前「日本の三大洋鐘」と称されたアメリカの組合教会から贈られた鐘があつたが、戦時中、軍に供出させられ無くなった。その「代品」としての十字架が今治教会に贈られ、研一がそれを持ち帰った

というわけである。

宮崎研一は、会社設立から二年後の昭和二十四年に組合員四十五名で「今治タオル輸出協同組合」を結成。初代理事長の要職に就いた。

この組合は、当時のタオル業者全員が加入した組織であつたことに大きな意味があつた。それはこの地でタオルが創業されて以来、かつてなかったことで、その団結力が産地として一大飛躍する起爆剤となった。

彼が理事長時代にタオル織機の〈政府登録制度〉を実現させた功績も忘れてはならないだろう。

宮崎研一はタオル事業以外にも力を注ぎ、ボーイスカウト今治地区評議会議長、淡交会今治支部長などを務めたが、何より特筆しておかなければならないのは、国際ロータリークラブ第三百六十八地区(兵庫県及び四国全県)のガバナーに就任したことで、ロータリーの長い歴史の中でガバナーに就任した人物は宮崎以外、この今治の地ではただ一人も出ていない。

日常生活においては「品格」を尊び、近親者にはいつも「ジェントルマンであれ」とさとしたといふ。

また、信念であつた「今治タオル産業の礎となる」をバックボーンに、走り抜いたが、平成元年二月二十四日、「一粒の麦」が地に落ちるがごとくに死去し、八十八年の生涯の幕を静かに閉じた。

阿部克行(市民文芸誌「とんどび」発行人)



今治タオル連合会秋季展示会参会者記念撮影(昭和26年10月6日)(最前列右から8人目が宮崎研一氏)



トレンドのビーチタオル

Bright colours. Blues, reds, greens and yellows. All the colours of the rainbow, spread out randomly on a hot Australian beach. What am I talking about here? Towels of course! But not your usual towel though, I'm going to talk about the big Aussie beach towel. When I was asked to write an article about towels, I knew in an instant that I would write about this type of towel, as my images of towels are closely associated to the Australian beach. "Why?" you may ask. Well, for all Australians, including myself, the beach is such an important part of our culture and lifestyle. Whether we live 100 metres or 100 kilometres from the beach, every respectable person in Australia owns a beach towel. It's that simple.

From the southern parts of Australia, where waters drifting from the Antarctic continent meet the warm waters of the Indian Ocean, the weather is usually much taller than the average of the rest of the world. The sun's rays are much more intense than elsewhere, and the water is much warmer. This is why the towels from this region are often made of a heavier material, and are often brightly coloured. The towels from this region are often made of a heavier material, and are often brightly coloured. The towels from this region are often made of a heavier material, and are often brightly coloured.

もう一つのビーチタオルの特徴は、ぶ厚いことです。太陽や砂、乱暴な扱いにも耐えられなければなりません。当然重さも重く、ぬれたり、砂にまみれたりするととても重くなりますが、ビーチを愛する人々にとって、それは大切なことではあります。小さな子供が自分と同じかっこいい大きなタオルを抱えて無心に水辺へと走る姿が見られます。僕が子供の時、家族と一緒にビーチへ行くのが楽しみでたまりませんでした。そして必ずお気に入りのタオルを持って行ったものです。それはオレンジ色で、サーフィンをしているカンガルーがプリントされていました。(これ以上オーストラリアらしいものはないでしょう!)海で泳ぎ、砂のお城を作り、最後は自分のタオルの上に横になり、遊び疲れた僕は太陽の下で眠りこんでしまったものです。一九八〇年代、僕の子供時代のサーフィンするカンガルーのビーチタオルは、一九九〇年代になると、サーフボードの会社の「Billabong」「Quiksilver」や「Jip Curi」などが大きくプリントされたものへと変わってきました。今日でもこれらのブランドタオルは全盛です。かつては実用一点張りだったタオルが腰に巻いてカッコイイ、新しいアクセサリへと変身してきたのです。今日、トレンドのビーチタオルを持つことは、斬新な水着、じゃれたビーチバッグ、最新型のサンングラスを持つと同じくらい大切なことです。多くのタオルに関するイメージは、水際へとタオルを抱えて思いっきり走り、子供達、海から上がって柔らかな暖かいタオルの慰めを求めるサーファー、また砂の上に座って水平線に沈む太陽を眺め、ひとつのタオルにくるまるカップルなど、オーストラリアのビーチに密着して描かれています。文/ブラッド・ハーバート 訳/神村優子

見城美枝子の「フェスタdeタオル」



けんじょう みえこ
見城 美枝子
(プロフィール)
エッセイスト。TBSアナウンサーを経てフリーに。現在、講演やテレビ等で活躍中。著書に「女のティータム」「タフでなければ女でない」など多数あり。

私の場合は82歳の母や大学生から高校生までの4人の子供の7人家族。とにかく、忙しい。そのため、パツと脱いだパジャマのズボンを手を持って足の裏から素早く乾布摩擦をしてそのまま両手に持ちかえると体操に移るのだが、ただ肩を回すよりはパジャマであれ何か布一本持つだけでグルリとほぐれるほぐれ方が違う。体の血の流れが良くなるのがわかる。この際、パジャマをタオルに替えて、日本全国の健康指向の人達に呼びかける方法はないか。思えば、わが家の家族とタオルのつながりはなかなかのものだ。子供達が赤ちゃんの頃は毎日、柔らかいタオルで乾布摩擦をしていたし、今わが家のぜいたくのひとつは湯上がりのバスタオル。使い回しはしないで毎日一人ずつ洗濯したてのものを使う。そのため、タオルかけを外してしまった程で洗面台の下には常時20枚程のバスタオルが洗い上がって入っている。湯上がりに洗い上がったフカフカのタオルに包まれる時の気持ち良さといったらない。一日の疲れが取れぐっすり深い睡眠に誘ってくれる。「タオルで祭り」フェスタタオルに因んでここはひとつイタリア語系で「フェスタdeタオル」は如何なものか。まず、全国にタオル体操を普及しその全国大会を今治で開く。帰りはタオル市でタオルを買って帰る。講演会の控室で職員の方が、自分の家の庭のレモンをもいで来てレモンティを出して下さったがその美味しかったこと。「フェスタdeタオル」、体操の後は地元無農薬ワックスなしのレモンが浮かぶレモン風呂とフカフカの今治のバスタオルに包まれ一泊していくお祭り、つくりませんか。

昨年暮れ、講演会に招かれた時、偶然がふたつ重なって起きた。まず最初の偶然是今治タオル体操愛好会の方々との出会いだ。この日の講演は「健康」がテーマで、私は朝一番に乾布摩擦と簡単な体操をして体を目覚めさせるところから始める、という話をしようとしていた。そうしたら、偶然にも私の講演の前にタオル体操愛好会の方々による実演があり、拝見していたら何と、私が毎朝やっている体操と同じ、つまり、肩の幅にタオルを持って上下左右斜めと両手を動かす体操が披露されたこと。そしてふたつ目は講演後案内していただいたところで様々なタオルを販売していたこと。たまたまお世話になっていた旅関係の編集者にお礼としてプチタオルを送りたいと思いつつデパートに行く暇もなかったからだ。この周辺が今治のタオル産業圏で、現在は中国産のタオルに押されていることを知って、俄然、ファイトが湧いた。今治のタオル、ひいては日本のタオル産業のために、このタオル体操をいかす手だてではないか。全国から日本のタオルのために人が集まる手だてはないものか。



木管の独り言

「昭和二十年。焼跡と瓦礫の中から立ち上がり、戦後、日本経済再建の機軸として我が紡績業界が選ばれし……」(日本紡績月報)より。敗戦で文字通りゼロからスタートした日本経済、その経済復興の原動力は繊維工業(紡績業)である。蒸気機関車のように工業の中心的存在として他の産業を力強く、たくましく引っ張り、そして、国民の生活水準の上昇のなかで、やがては自動車産業、電気工業へとバトンを渡してきた。紡績工場が生産される綿糸は、板、ブナ、ケヤキ、樫などの広葉樹で作られた木管に巻かれていた。近年、リサイクルできない軽いプラスチック管にとって代わられ、転産業で今は存在しない紡績工場の膨大な量の「木管」が雑木管として廃棄処分されようとしている。紡績工場が焼印された木管には、様々な思いがこもった糸のエキスが沁み込んでいるのではないだろうか。昨今の日本経済の低迷を思えば、資源の無い国にあつて、綿花から落綿(糸屑)まで捨てるものがなかった「紡績」のモノ作りの思想と、「D51」蒸気機関車のような力強いパワーが、今一番大事なのかも知れない。



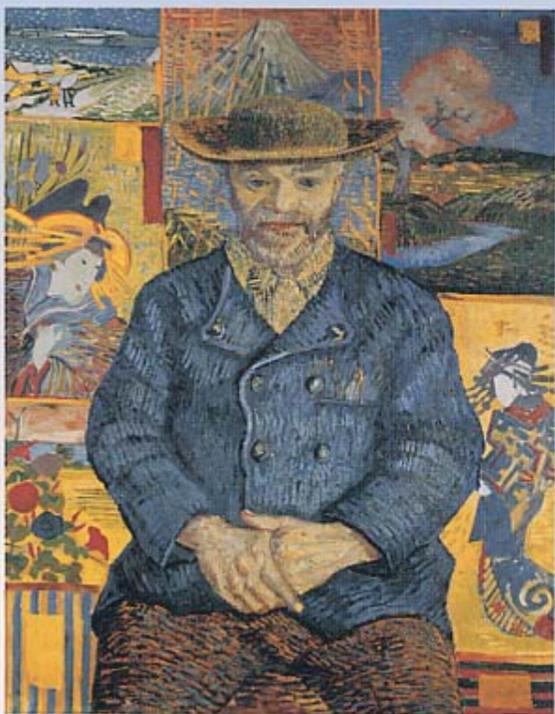
四国タオル工業組合 理事 電話活性化委員長 宮崎 弦

ゴッホは好きで、日本に憧れてる。

ファン・ゴッホといえば、日本人が最も愛している画家と言っている人がいる。そのゴッホが真底に日本人になりたかったことを、他ならぬ愛媛県今治市の人たちに伝えたいのである。

ゴッホは一八五三年にベルギー国境に近いオランダのズンデルトに牧師の子として生まれている。

一八五三年といえば、今からさつと二五〇年ほど前で、日本では嘉永六年。アメリカの使節ペリーが黒船四隻を率いて東京湾(江戸湾)に姿を見せて、徳川幕府は腰を抜かさんばかりに驚倒した年である。



Van Gogh(ファン・ゴッホ)「タンギー爺さんの肖像」1887年冬～1888年

ゴッホは、はじめ父の教会を継ぐべく、牧師を目指す。どうしても牧師の免許を取ることができず、画家たらしめとして、愚直な勉強をはじめた。二十七歳だったから、画家の出発としては遅いといえるだろう。

ゴッホが日本の浮世絵に初めて接したのは三十三歳のときだ。時あたかも、ヨーロッパはジャポニカ文化に湧き立っており、沢山の浮世絵版画が流入していたのである。

ゴッホはパリに移り、そこでも浮世絵の洗礼を受け、ロートレックやモネ、ルノワールと交流するなかで、大胆な明るさに満ちた絵を描きはじめるのだった。

なにしる、ゴッホをはじめ、印象派の画家たちは、日本の画家、浮世絵師に激しいショックを受けている。

その大胆な描線、強烈な遠近法、鳥の眼、虫の眼による画の構成。どれ一つとっても、それまでのヨーロッパの画風には無いものばかりだった。

ゴッホは、完全に日本熱にとりつかれ、広重の浮世絵を手本にひたすら模写に明け暮れている。

はては、日本へ行きたい、日本の絵描きのような生活をしたと熱望しはじめた。しかし、日本はあまりに遠いのである。

と、友人のロートレックが仰天のアドバイスしてくれたのだ。

「日本へ行きたかったら、パリから列車に乗り、真直ぐ南下すればいい。たどりついたところが日本だよ。」

ゴッホより十一歳も若いロートレックは、ロートレック伯爵家の出身で、パリの画壇に飛び込んだ変り種だが、豊かな教養を身につけ、日本の浮世絵も蒐集していて、ゴッホが最も信頼している友人だった。

だから、ゴッホはロートレックの言葉をそのまま信じて、すぐさまパリ駅から列車に乗ったのだ。

着いたところはアルル。

私も同じコースでアルルに到着したが、アルルの街は日本とは似ても似つかぬ闊牛場のある石と煉瓦の町だ。しかし、郊外の漁村に出ると、そこは地中海が広がり、浜辺や小舟、曇ぶきの家などがあって、日本の浮世絵師の広重たちが描く風景があったのだ。

そうなのだ。ロートレックのアドバイスは、「地中海は日本なのだ」ということだった。さあ、ここで今治が登場するのです。

ロートレックはフランスの高名な美術

評論家の「日本探訪」のエッセーを読んでいた。そのエッセーは、「イマバリにて」と題されている。

「イマバリという港町で、美しい夕陽に心を奪われてしまった。なんと、ここは我々の美しい地中海そっくりの光景が広がっているのだ。セトナイカイとよばれる日本の海は、ヨーロッパの誇り地中海そっくりである。」

だから、ロートレックは地中海に行けば、そこに日本があると言ったのだ。

ゴッホは明るい陽光に満ちた南仏プロバンス地方を日本と信じて、自分の絵画を開花させていく。

『日本に行きたい。日本人になりたい。日本の絵描きのように生きたい。』

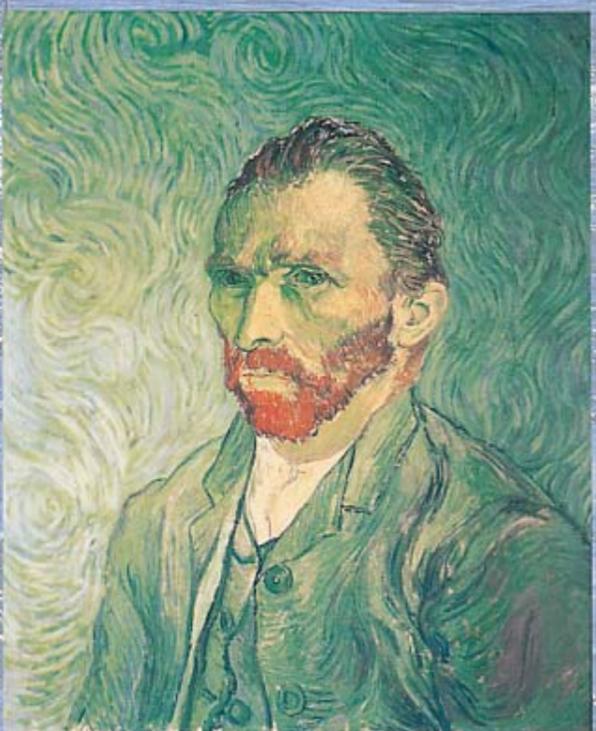
弟のテオに送った手紙の中に、何度もくりかえされている。

ゴッホは、地中海で日本に遭遇してから二年。三十七歳であこがれの日本を見ることなく、自殺してしまう。

私は、この日本人になりたいと熱望していた稀有の芸術家を、日本に連れてくることのできたら、と思うのだ。どんなにゴッホは狂喜し、さらに素晴らしい「日本の風景」、日本人の肖像を描いてくれたに違いないと信じている。

だからこそ、今こそゴッホの魂をイマバリに呼びたいのである。

そしてぜひ、ゴッホに「イマバリにて」と題したたくさん絵を描いてほしいと思うのだ。



Van Gogh(ファン・ゴッホ)「自画像」1889年9月

えっ、どうやって描くのか？
私は、今治が誇るタオルに、ゴッホ画風の瀬戸内海光景を織り込んでもらいたいのである。

ゴッホの絵をみてほしい。あの画布を支配する渦巻きは、まさに来島海峡の渦潮そっくりではないか。あのタッチで、ゴッホ好みの「今治港の星月夜」とか、「島のオリイブ畑」とか、「沖ゆく船々」とかを織り込んで、日本に、そして世界に紹介してほしいのだ。

早坂 暁 (作家)



はやさか あきら
早坂 暁 (作家)

昭和4年北条市生まれ。テレビドラマの脚本家や小説家として活躍中。主な著書に、「夢千代日記」や、故郷を描いた「ダウンタウンヒーローズ」「花へんろ」などがある。芸術選奨文部大臣賞、放送文化賞などを受賞。



Van Gogh(ファン・ゴッホ)「星月夜」1888年9月

今治のタオルによせて

”空気“をデザインする

文化服装学院名誉学院長

小池千枝

今治市は、思い出すと懐かしい街です。地方には珍しいファッションの発信地だったので。東京の文化服装学院と、早くから連鎖校になっていたヴィクトリアアテナインスクールがありました。二代目の学院長は高田賢三さんとデザイン科の同期生で、本校卒業と同時に私の講習会やファッションショーも企画していただき、丹下健三氏の初期の建築物である今治市公会堂で三百人を越す受講生を迎えました。丹下健三という世界的建築家を生んだ街は、クリエイティブなファッションへの興味を持つ方も多かったのではないでしょうか。当時の写真をご覧ください。昭和三十八年だったと思いますが、この頃のトップモデルの入江美



持っ方も多かったのでしょう。当時の写真をご覧ください。昭和三十八年だったと思いますが、この頃のトップモデルの入江美

樹さんです。四国の今治から始まり、高知、高松と講習会を楽しく移動しました。そんな今治は北九州と肩を並べる程の活気が満ちていました。今治を度々訪れることになって、ここがタオルの特産地であることを知りました。孫が生まれ、その誕生と同時に、優しい空気を含んだ柔らかなタオルに受け止められる…。赤ちゃんの肌にもふれるのは、絹でもなくウールでもなく土から生まれてくる木綿なのです。冬の掛け布団として親しまれている羽布団もタオルを掛けると落ち着きます。夏には冷房を止め、タオルのシートとタオルケットで涼しく、また袷元に掛けるタオルは自分自身の物として個性的で軽く、私は色柄のチエックを愛用しています。

仕事の都合で度々フランスにも出かけますが、そこでも気になるタオルはよく見かけます。見事な柄や色出しなので思わず買ってしまうが、密度が高すぎてタオルとしては使わず、インテリアとして楽しみます。

タオルの夢は益々広がる…。リゾートとして色美しく、タウンウェアとして感触を楽しむ。空気を充分に含み、ニットのよう伸び縮みの加工をすればスポーツウェアにもなる。

今治こそ感性と技術を考える産地だから、創設期の原点に戻るのも一案で、その原点を軸に新時代の流れに乗る創造力を生かしてみたいか



小池千枝先生 作品集

がでしようか。センスの良いデザイナーならその用途を拡大することができるでしょう。

瀬戸の夕焼け色の夢

今治明德短期大学教授 医学博士

原映子



気がつけば、人にもものを教え、先生と呼ばれる

職業に就いてからもう何十年にもなります。今でこそ人前で話をするのはまあまあ平気ですが、小さい時は内気で引込み思考で、一人で本を読んでいるのが大好きな子供でした。小学校の図書館は大好きな場所、いろんな本を夢中で読み漁りました。そして夜、布団に入ってから、自分を物語の主人公にしてあれこれ空想するのがとても楽しかったのを覚えています。

本の中でも赤毛のアンシリーズは大好きで、お

小遣いを貯めて買った十冊の新潮文庫は今でも大切に本棚にあります。その中でも今でも妙に心に残っている話があります。それは、物語の中で結婚の決まった女性がまず二番にすることは、新しい家庭で使うテーブルクロスやナフキン、タオルやシート、ベッドカバーなどを用意し、それに自分で美しい刺繍やレース編みを施すことであるという話です。素敵なりねんを沢山準備することが花嫁の自慢であり、そしてその作り方は

けて心を含めて作られます。そこには時間のゆとり、心のゆとり、本当の豊かさがあります。

なぜそんな話が子供に残ったのかを考えてみると、生活の中で使われる布類に対する考え方が自分たちとは違つと感じたからだと思うのです。欧米ではリネンは長い時間をかけて生活の中に根づき、家庭の中で代々伝えられ、真の文化として熟成されています。一方日本では、身に付ける衣装に関しては素晴らしい歴史と伝統が残っていますが、生活の布類にはそれがあまりありません。日本では生活布(リビングクロス)の歴史が浅く、使い捨ての感覚が強くて、まだまだ真の文化に育っていないと思うのです。

必要以上に物が溢れる現代社会において、これからは本当にいいものを選ぶ確かな目を育て、自分にとって本当に使いやすいものを、愛着を持って長く使うことが必要です。その目は家庭の中で、小さいときから良質のものに囲まれた生活することによって自然に育まれます。大切なものを大切に使う生活が本当に豊かな生活のような気がします。そしてそんな素敵なたわりのある生活布(リビングクロス)をぜひ今治で作ってほしいと願っています。

私自身は、瀬戸の夕焼け色のふんわりとしたタオル地のシートで眠ったら、夕焼け色のいい夢が見られるかななんて思っています。

今治タオル体操の始まり

今治タオル体操愛好会 会長 近藤ヤス子

平成十二年十月に今治タオル体操が誕生しました。何故作ったのか？私達は今治生まれの、今治育ちの女性グループです。物心ついた時から、身内の中の誰か、かれか、タオル産業に従事していました。そして、生活を支えてもらいました。街は活気に満ち、経済も潤い、充実した日々を送りました。子育ても終わり、自身の健康を考える歳になった頃、思いもよらぬ不況に直面しました。地場産業のタオルも例外ではありませんでした。暗い話ばかりが聞こえてきた頃、グループの一人がタオル体操を作らない？のひとことで、健康作りと地場産品のアピール、そして街興しと三拍子揃えて作る事に決め、講師の指導も受けて、一年がかりでタオル体操を作りました。行政や、他の女性グループも巻き込んで平成十二年十一

月には、普及の為の今治タオル体操愛好会が発足しました。出前体操と銘づいて、施設や企業、イベント等にも参加し、この一年間は無我夢中で突き進んで、目が回る程、忙しい日々の連続でした。体操も三種類に増え、今住民謡の木山音頭をベースに老若男女が参加出来るようにバラエティーにとんでいます。また、ユニフォームもタオルで作りました。テレビや新聞にも度々紹介され、少しずつ市民に浸透してきました。平成十二年十二月二日は、四国タオル工業組合さんの協力を得て、タオルフェアの中でコンテストを開催しました。百四十人の若いも若きも、快く参加してくれて大盛況で楽しい一日でした。

これからは、しまなみ海道沿線、本州、全国へとタオル体操を普及して文化を伝えたいと、夢を大きく持っています。そして、活力のある今治を取り戻すまで、元気なおばちゃんグループは今日も赤と黒のタオルのユニフォームを身にまとい、赤のタオルを振り振り、女性のエンパワーメント全開で頑張っています。



今治タオル体操

正月廿二日盛烟式
今治の女衆



タオルの
ふるさと紀行

郷土にはその地域でしか味わえない「味」がある。その地域で獲れたものをふんだんに使い、親から子へと伝え続けられた「味」もまちががなく「郷土料理」なのである。それはどこか優しくて、どこか懐かしい。

今治藩家老家の 婚礼料理

愛媛大学教育学部助教授
福田安典・長野隆男

一 江嶋家文書

江戸時代の初めに、浪人の身ながら小説家として全国に名を轟かせていた江嶋為信(ためのぶ)が今治藩に採用された。この為信という男、小説家としても有名であるが、後年俳諧にも遊び、かの井原西鶴とも交友を持ち、今治いや愛媛を代表する文人である。ところが、この為信もしくは江嶋家の資料が



今治には少ない。どこにいったんたろうか、戦災で焼けたのか、と案じていたところ、愛媛大学附属図書館のデジタルコンテンツ研究会の活動の二環として発見され、二〇〇一年にめでたく愛媛大学に寄託されることになった。実に百年を超えたお里帰りである。早速、教育学部の大学院の講義を利用して整理と解説がはじまったが、その時に思わぬ資料が出現した。それが、天保四年(一八三三)正月二十一日に江嶋家でとりおこなわれた婚礼資料である。

二 天保四年の家老家の婚礼献立

その婚礼資料の中に、当日の婚礼料理の献立目録がある。その「夜分」すなわち夜の宴の料理は次のようなメニューであった(二内は筆者、適宜濁点などはつけた)。

濃醬(つみ入・大こん・焼とぶ(豆腐)・いも・牛蒡(ごぼう))、香の物、茶漬飯、大鉢肴 松竹梅(板はんへい・焼鳥とささい「サザエ」・車えび・小たい・飯たこ・玉子・長芋・河童「こつたけ」・九年母「クネンボ」・にんじん・ぶきのとぶ「フキノトウ」・巻鰯)

この献立を再現することができれば、江戸時代の家老家の婚礼料理を口にする事が出来るはずである。また、この婚礼は家庭でとりおこなわれたので、懐かしい今治の家庭料理も再現できるかもしれない。その

希望を胸に、教育学部の学生らがこの料理の再現へ取り組んでくれた。

三 料理再現

料理の再現についてはいくつかの方法があるが、今回は今治での聞き取り調査を採用した。すなわち、昔の味を知る今治の方に、このメニューを見て思いつく調理法を教えてください、そのデータをもとに再現したのである。その結果は、例えば濃醬(こくしよ)には米のとぎ汁と麦味噌を用いる、巻鰯には牛蒡と人参が欠かせないなどの貴重な意見を提供していただいた。また、曾我増平商店や大沢食品さんからも材料提供を受けた。本当に、今治の人情に支えられての再現となった。また、魚はその日の朝四時に朝市で仕入れた。そして昨年の十二月には料理再現と試食会を愛媛大学で開催した。参加者からは「意外に質素」という声が多かった。テレビや映画などのような豪華な食卓ではない。しかし、その質素でそれでいて懐かしい味こそがかつての今治の馳走であり、その奥ゆかしい味をかみしめると、宴に酔いしれた今治人の笑顔が目に見えようであった。



松竹梅
大肴

松竹梅
大肴
九年母
にんじん
ぶきのとぶ
巻鰯
河童
小たい
車えび
焼鳥
板はんへい
茶漬飯
濃醬